

保育科学生の非認知的能力という言葉の理解を助けるために

横井一之*

はじめに

非認知的能力という言葉が筆者が初めて目にしたのは3法令ガイドブック（汐見稔幸（2017））の中である。そして川崎医療福祉大学（岡山県倉敷市）の保育学会では、この言葉が花盛りであった。その保育学会の実行委員会企画シンポジウムで、2人のシンポジストがこの言葉を取り上げられた。名古屋にもどり、2000年ノーベル経済学賞受賞者アメリカ・シカゴ大学教授ジェームズ・ジョセフ・ヘックマン（James Joseph Heckman、1944年4月19日生）が著した『幼児教育の経済学』（2015）を読んだ。

ヘックマンは一般教育修了検定（GED）取得者の幼児教育履修・非履修に触れ、GEDは認知能力を測定するものだが、幼児期には認知能力のみでなく非認知能力が育ち、その履修経験が後に社会的成功を収める元になると主張した。そして、幼児期の教育投資が後の社会的成功に有効に働くことを示した。

北野幸子（2017）は、「非認知能力とは、IQ（知能指数）などの、テストで測ったり、数値化したりすることが出来る知的な能力（認知的能力）とは異なり、意欲や、好奇心、粘り強さ、意思などの力のことです。」という。非認知能力を説明するとき、IQのような保育科学生にとって理解の難しい用語を用いるとより難解になる。この欄に非認知能力について学ぶなら、次の2つの報告書が参考になるとあった。

国立大学法人お茶の水女子大学（2016）『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究—感性・表現の視点から—』には第2章に非認知能力が高まる保育の事例が小学校低学年の6事例を含め、全部で30事例が示してある。そのまとめの中で、非認知的な能力を表すキーワードとして、「安定・安心」「挑戦・試す・試行」「自発性・能動性・主体性」を上げている。第3章まとめ第3節では「非認知的な能力と認知的な能力との関連」が取り上げられ、第2章の事例では、その解説において育つ能力が「非認知的な能力」と「認知的な能力」とに2色に分けて書かれており、どちらも切り離せない関係であることが分かる。

国立教育政策研究所（2017）は遠藤利彦氏を代表に『非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』を通じて非認知的能力の研究の動向、文献調査、実証研究を行いまとめた。

西坂小百合ら（2017）は、都内幼稚園に通う3～5歳児を対象に、保育の中でどのように非認知能力が育つかを調査した。また、非認知能力と認知能力の発達との関連を、標準化された調査法（言語発達、数的推論、心の理論）を用いて明らかにした。非認知的能力はもともと教育の経済的効果の実証過程で取り上げられ、保育の研究者が追試験をする中でよく話題に上るようになった言葉である。子どもは何らかの活動をすれば認知能力は高まるはずで、保育の世界では、非認知的能力と認知的能力はともに大切であるはずである。

本稿では、以上の資料を取り上げ、保育科学生が非認知的能力という言葉の理解が難しい理由を探り、学生の理解を支援したい。

* 東海学園大学教育学部 教授

1. 「(新幼稚園教育要領等) 3法令ガイドブック」の中の非認知能力について

汐見稔幸(2017)は、新保育所保育指針の説明の中で「子どもの教育はできるだけ早くから開始するほうが効果が大きく、費用がかからないこと、また、その教育はいわゆる認知的スキルだけでなく、非認知的スキルを伸ばすことで後の効果が大きく、持続するということも見いだされました。」と述べている。そして非認知的能力の社会情動的スキルの伸ばし方について言及している。また、非認知的能力をとりあげたからといって、認知的能力、認知的スキルが乳幼児期は大事でないということではないと釘を刺す。

2. ジェームズ・J・ヘックマン(2015)「子供たちに公平なチャンスを与える」より

この著作の書き出しで、ヘックマンは「今日のアメリカでは、どんな環境に生まれあわせるかが不平等の原因になる。これを適切な社会政策で修正する必要がある」と述べ、その社会政策のための3つの教訓を次のように言う。「第1に、人生で成功するかどうかは、認知的スキルだけで決まらない。非認知的な要素、すなわち肉体的・精神的健康や、根気強さ、注意深さ、意欲、自信といった社会的・情動的性質も欠かせない」と。「第2に、認知的スキルも社会・情動的スキルも幼少期に発達し、その発達は家庭環境によって左右される」「第3に、幼少期の介入に力を注ぐ公共政策により、問題を改善することが可能だ」と加える。さらに、「両極化」「認知力を超えるもの」「幼少期の重要性」「幼少期の介入が変化をもたらす」「実質的な問い」「再分配ではなく、事前分配を」と続く。

要約すると、「ここ30年間に所得の多少により両極化が顕著となった。アメリカの公教育ではテストの結果などの認知能力に重点をおいているが、社会的成果を予測する上で、認知的スキルも非認知的スキルも大切である。そして、認知・非認知両能力の格差は、その社会的集団でも早くから開く。よって、幼少期の環境は重要であり、子供には注意を払うことが必要だと言う。幼少期の介入が変化をもたらす例として、ペリー就学前プロジェクト、アベセダリアンプロジェクトはリスク指数の高い家庭の111人の子供を対象とした。両プロジェクトも介入したときは認知的能力であるIQも上昇するが、介入をやめると元の数字にもどる。ただし、非認知能力は介入をやめた後も高い状態を保ったという。そして、幼少期の介入は経済的効率性を促進し、生涯にわたる不平等を低減する」と結んだ。

続いて、幼少期の教育プログラムを行い、アメリカ社会において恵まれない環境に育つ子供たちの諸問題に取り組む際の実質的な政策課題について述べている。

最後に、幼少期の大切さを再度唱え、事前分配、つまり恵まれない子供の幼少期の生活を改善することは、社会的包容力を育成すると同時に、経済効率や労働力の生産性を高めるうえで、単純な再分配よりもはるかに効果的であるとまとめている。

パートⅡでは、ヘックマンの主張に対して表1の人々がそれぞれの論を展開している。

表1 各分野の専門家によるコメント

- | |
|--|
| 1. マイク・ローズ カリフォルニア大学ロサンゼルス校大学委員教育・情報学部教授
『職業訓練プログラムも成果を発揮する』 |
| 2. ロビン・ウェスト ジョージタウン大学法律センター法学および哲学教授
『幼少期の教育は母親の人生も改善する』 |
| 3. チャールズ・マレー アメリカンエンタープライズ研究所W・H・ブレイディ研究員
『幼少期の教育的介入に否定的な報告もある』 |
| 4. キャロル・S・ドウェック スタンフォード大学心理学教授
『思春期の子供への介入も重要だ』 |

5. デヴィッド・デミング ハーヴァード大学教育学部大学院教育学および経済学准教授
『質の違いよりすべての子がプログラムを受けられることが大事』
6. ニール・マクラスキー ケイトー研究所教育的自由センター副所長
『ペリー就学前プロジェクトの成果は比較的小さい』
7. アネット・ラロー ペンシルヴェニア大学社会学教授
『学業成績や収入は大事だが、人生のすべてではない』
8. ルラック・アルマゴール ワシントンDCのチャータースクール教師
『良いプログラムは何が違うのかを研究し続ける必要がある』
9. アダム・スウィフト、ハリー・ブリグハウス オックスフォード大学ベリオールカレッジ政治学講師、
ウィスコンシン大学マディソン校哲学教授
『恵まれない人々の文化的価値観に配慮した介入を』
10. ジェフリー・カナダ ハーレム・チルドレンズ・ゾーンの創設者代表
『就学前の親への教育と「考え方をを変えること」が子供たちを救う』

3. 保育のキーワードより（保育ナビ2017フレーベル館）

北野幸子により、非認知的能力については表2、認知的能力については表3の様に説明されている。

表2 非認知的能力（北野幸子（2017）『保育ナビ7月号』より引用）

非認知的能力の内容は多岐にわたります。乳幼児期に育みたい非認知的能力について、例えば保護者や社会に分かりやすく伝える場合、主なものとして次の3つに整理して説明するとよいと思われます。①自尊心、②思いやり、③自制心（セルフコントロール）。①は自分の根っこづくり、②は他者との関係性の基礎、③は社会で生きていく礎です。

表3 認知的能力（北野幸子（2017）『保育ナビ7月号』より引用）

自らの認知したことを自覚する力、つまり、認知を認知する力を「メタ認知能力」と言います。「分かっていることを自覚する」「知っているか知っていないか、わかっているかどうか」を意味します。認知的能力を育てることや、メタ認知能力を育てることは、かつてより教育において大切な課題とされてきました。何をどのように学ぶのか、学習や問題解決型学習でどういった方略をとればいいのかを知っていることや、考え判断する力の育成が、子どもの学習に関係していると考えられてきたからです。

4. すくすく子育て・NHK-Eテレより—認知能力と非認知能力—

司 会 山根良顕と優木まおみ

放送日 2018年5月12日（土）

専門家 遠藤利彦、河邊貴子

目次を見ると、「『非認知能力』って、どんな力？」「非認知能力を育てるには、いつから、どんなことをすればいい？」「非認知能力を育むために、どんな遊びをすればいい？」「子どもに接する時間が少ないと、心の育ちに影響はある？」「非認知能力と性格に関連性はある？」「すくすくポイント『ごっこ遊び』は子どもの世界を広げる」「専門家からのメッセージ」とある。

初めに、表4のように遠藤利彦氏は非認知能力の説明をした。

表4 遠藤利彦氏の非認知能力についての解説

非認知能力には、おおきく2つの力がある。まず、自尊心、自己肯定感、自立心、自制心、自信などの「自分に関する力」である。そして、一般的に社会性と呼ばれる、協調性、共感する力、思いやり、社交性、良いか悪いかを知る道徳性などの「人と関わる力」だという。
さらに、「非認知能力」は「心の土台」のようなものだという。

次に、河邊貴子氏は「子どもたちはおもしろい遊びを発見すると集中する。遊ぶことにより、自然に主体性や意欲や頑張る力などが身に付いていく。これが非認知能力だ」という。

非認知能力を育てるには、いつから、どんなことをすればいい？という質問に対して、遠藤氏「夢中で遊べるように、子どもが安心できる環境を。」河邊氏「学ばせるではなく、自分で身につけていく。」そして「子どもが自分から関わることを大事に。」という。

5. 国立大学法人お茶の水女子大学（2016）『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究—感性・表現の視点から—』より

前述の北野幸子氏が大変参考になると紹介なさった報告書の関連の書物で、表5はまえがきにお茶の水女子大学附属幼稚園園長藤崎宏子氏が記されたものである。

表5 非認知的な能力の発達をとらえる研究のまえがきより

（前略）近年の欧米諸国では、幼児期から成人期までの長期的な追跡研究において、幼児期に体得した「非認知的な能力」の高さが、教育期や成人期の健全で高度な発達の支えとなるという知見が示され、大きな反響を呼んでいます。このことは、現行の幼稚園教育要領における幼児期の教育理念の骨格をなす、「心情・意欲・態度」などを育むことの重要性を再認識させるものと言えます。しかしながらわれわれは、このような形で「非認知的な能力」が注目されることにより、「認知的な能力」の発達に資する、「非認知的な能力」のみが重要視されるようになることへの危惧も覚えました。それゆえ、この機に、全国の国立大学附属幼稚園が大切にしてきた「非認知能力」を、幅広く捉え直してみる必要があると考えてみました。（後略）

第1章では、遠藤利彦氏、篠原郁子氏、堀越紀香氏の3氏の非認知的な能力についての講演を載せている。

第2章では、第Ⅰ期（3歳児入園～4歳児前半）の6事例、第Ⅱ期（4歳児後半～5歳児前半）の9事例、第Ⅲ期（5歳児後半）の9事例、児童期（小学校1～2年生）の6事例の計30事例が示されている。各事例の中で、活動の様子の欄ではそれぞれの場面で非認知的な能力のキーワードを示し、それらの分析の欄では認知的な能力の部分と非認知的な能力の部分を色分けして示している。これを読むと、認知的な能力と非認知的な能力が相互に育つ様子が分かる。色分けで一目瞭然なのは、3歳から児童期へと年齢が高くなるにしたがって、非認知的な能力の育つ場面の割合が少なくなり、認知的な能力が育つ場面の割合が高くなっている。これは、認知的な能力の育ちは知識、技術の積み上げが必要なので自明のことである。

第3章では、各時期に育つ非認知的な能力のキーワードを取り上げている。第Ⅰ期は「挑戦・試す・試行」「自発性・能動性」「安定・安心」、第Ⅱ期は「自発性・主体性・能動性」「試す」「つながる・連帯・一体感」、第Ⅲ期は「葛藤」「共有（目的）・イメージ・気付き・思い」「挑戦・試す」、児童期は「受容」「自発性」「観察力」がそれぞれ抽出された回数の多い言葉である。そして、どの時期にも見られた「非認知的な能力」のキーワードとして、「安定・安心」「挑戦・試す・試行」「自発性・能動性・主体性」をあげている。

6. 国立教育政策研究所『非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』（2017.3.）より

国立教育政策研究所は遠藤利彦氏を中心に、社会情緒的コンピテンスとは何か、また社会情緒的コンピテンスの測定を行った。これはその報告書である。

非認知的能力の発端はヘックマンとルビンスタイン（2001）が「個人がもっている認知的でない能力を示唆したこと」と述べている。また、OECD（経済協力開発機構）の『Skills for Social Progress : The power of Social and Emotional Skills』（OECD, 2015）の中で、人のスキルを認知的スキルと非認知的スキルに大きく整理していることを紹介している。次の章ではIQ神話や「非認知」なものとは何かに言及し、能力=abilityではなくskillsであると説明を加えている。そして、章のまとめにおいて、非認知な心の性質=社会情緒的コンピテンスの中で特に大切にしたいものとして、基本的信頼感とアタッチメントをあげている。

次の部では社会情緒的コンピテンスの内容と発達についての文献調査を報告している。対象の時期が乳児期から青年期までで、非認知的能力は生涯にかけて発達することが理解できた。

最後の部では、社会情緒的コンピテンスの実証研究として、幼児期の社会的コミュニケーション行動、幼児期のセルフコントロールの発達、幼児期の社会情緒的能力と社会的行動の発達、児童期・青年期の社会情緒的コンピテンスの様相についてまとめられている。筆者は社会情緒的コンピテンスという言葉自体を保育の中であまり用いないので、この言葉を口にするだけで舌を噛むときがある状態である。

7. 西坂小百合他（2017）『幼児期の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係』より

西坂小百合、岩立京子、松井智子は、幼児期に育つ非認知能力を担任保育者の評定によって定め、その様相を確認した上で、非認知能力の発達と認知能力及び家庭環境や家庭でのかかわりとの関連を検討した。

西坂小百合他（2017）はJohn, O.P. & Srivastava, S. (1999) によるビッグファイブ因子のリストを参考にし、ここに含まれる特性から、幼児期に幼稚園生活の中で見られる姿として「自発性」「意欲」「集中」「興味」「協調性」「素直さ」「共感」「折り合い」「自己主張」「自己抑制」「生活力」を抽出し、11項目を作成し、保育経験20年以上の保育者が項目を検討した。また、認知能力の調査には言語発達（絵画語彙検査PVT-R）、数的推論（K-ABC）、心の理論（誤信念課題）を用いた。

「自発性」については、「1. 遊びや生活の中で自発的な姿が見られる。」という質問に対して、「かなりあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で、年長の修了時に「かなりあてはまる」に到達してほしいという姿を想定して回答した。

これとは別に、子どもが認知能力の検査をしている間、保護者は家庭環境についての調査用紙に回答した。具体的には、「1. 休みの日には子どもと遊ぶようにしている。」に対して、「かなりあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で答えた。

上記の各項目との分析から、「非認知能力が幼児期において形成される部分があること、認知能力と非認知能力が少なからず関連すること、親とのかかわりからの影響も示唆されること。」を示した。さらに、「日本の幼児教育において自明の理として大切にされてきた心情・意欲・態度が、非認知能力の育成に貢献していると考えられるが、そのことを意識している保育者はあまり多くないように感じる。」と付け加えた。

8. 考察

「心情・意欲・態度」は1989（平成元）年の幼稚園教育要領の改訂以来、保育内容のねらいとして示されてきた。筆者は、幼児期に育てたい能力はこの「心情・意欲・態度」を幼児がもつことだと考える。もちろん、「心情・意欲・態度」は非認知的スキルに重心がある。このことも含め、これまで示してきたことを表6にまとめる。

表6 非認知的能力と認知的能力

	非認知的スキル 非認知的な能力 非認知的能力 非認知能力 Non Cognitive Skills	認知的スキル 認知的な能力 認知的能力 認知能力 Cognitive Skills
幼稚園教育要領等1 「育みたい資質・能力」	学びに向かう力・人間性等	知識及び技能の基礎 思考力・判断力・表現力等の基礎
幼稚園教育要領等2	心情・意欲・態度	
James・J・ヘックマン	非認知的スキル（肉体的・精神的健康、根気強さ、注意深さ、意欲、自信といった社会的・情動的スキル）	認知的スキル
遠藤利彦氏 （すくすく子育て）	「自分に関する力」 「人と関わる力」	
北野幸子氏	自尊感情、思いやり、自制心	知覚、推論、判断、決定、記憶、言語理解
お茶の水女子大学附属幼稚園	物事をやり遂げようとする気持ち、自分の気持ちを調整する力、折り合いを付ける体験	
国立教育政策研究所	「長期的目標の達成」「他者との協働」「感情を管理する能力」の3つの側面に関する思考、感情、行動のパターン	知識、思考、経験を獲得する能力、獲得された知識に基づく解釈や推論
西坂小百合氏他	自発性、意欲、集中、興味、協調性、素直さ、共感、折り合い、自己主張、自己抑制、生活力	言語発達、数的推論、心の理論

2018（平成30）年に、幼児教育から高等学校教育までを通して、幼稚園教育要領はじめ高等学校学習指導要領に至るまで、各学校等の教育で育みたい資質・能力「知識及び技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」が示された。これらの資質・能力は前者と2番目が認知的能力、3番目が非認知的能力に分けることができると考える。これらを、表6の幼稚園教育要領等1の欄に表した。

保育科学生にとって非認知的能力が理解しにくい理由を考えたい。1つめの理由は、用語が難しいからである。表6を見ると、非認知的能力の欄には、同じ意味の言葉として「非認知的スキル、非認知的な能力、非認知的能力、非認知能力、Non Cognitive Skills」が並記してある。中学校以来筆者は、能力 = Abilitiesと覚えた。非認知能力はパーソナリティ = 人格なので、Skillsだという。本稿のタイトルでは、「非認知能力」としたが、表6の最上段で用いたように「非認知的スキル」とするのが良いと考える。

2つ目の理由は、保育では非認知的能力の指導が中心だからである。保育者は、日頃からこの内容はどちらのスキルが伸びる指導かと意識して指導する習慣がない。5章で示したお茶の水大学の著作では、全国の国立大学附属幼稚園の先生方が幼児期の事例を24あげ、それぞれの指導内容についてここは非認知的

能力が、ここは認知的能力が養われていると分類して示した。筆者が見る限り、非認知的能力の説明の方はすんなり受け入れられる感じだった。ただし、幼児期に非認知的能力のみが育つという意味ではなく、西坂小百合氏等のグループが示したように、非認知的能力は認知的能力と相互に関わりながら育つものだと考えられる。別の言い方をすれば、幼児期は認知的能力だけを取り出して指導するのが難しい時期だといえる。

3つ目の理由として、保育科学生が数量を扱うのが苦手だからである。表6の西坂小百合氏等の欄を見ると、非認知的能力の例として「自発性、意欲、集中、興味、協調性、素直さ、共感、折り合い、自己主張、自己抑制、生活力」を上げているが、これらはその性質から量的に取り上げることができない。例えば「素直さ」が10点満点で6点という表現は、その項目がパーソナリティの一部という点から不適切である。西坂小百合氏等の論文では、保育者が「6. 大人に言われたことを素直に受け入れる。」に対して、145名の幼児を5つの段階に分けてランク付けした。本来は数量化できないものを、当事者了解の上で行う、いわば数字のマジックである。保育科学生は、数量を柔軟に扱うのが苦手である。多くの書物に「非認知的スキルとは、IQ（知能指数）などの、テストで測ったり、数値化したりすることができる知的な力（認知的スキル）とは異なり、……」と書いてある。幼児のIQの測定はできないと学んできた筆者には、この表現がいつも気になっている。

表7 保育科学生が非認知的能力という言葉を理解しにくい理由

1. 用語の不統一による。(非認知的スキル、非認知的な能力、非認知的能力、非認知能力)
2. 非認知的能力は、保育では当たり前になっている内容だから、改めて考えにくい。
3. 保育科学生は数学が苦手だから、改めて考えにくい。

では、保育科学生が非認知的能力をすっきり理解するにはどうしたらよいただろうか。できれば、本稿で示した論文等にすべて目を通したうえで、非認知的能力の概念を整え、筆者の示した表8「保育現場における非認知的能力とは？」を見てほしい。

表8 保育現場における非認知的能力とは？

1. 非認知的能力という言葉は、幼稚園教育要領等には載っていない。
2. 幼児期にバランスよく育みたい資質・能力は「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」である。
3. 非認知的能力にあたるのは「学びに向かう力・人間性等」である。
4. 幼児期に特に伸びる資質・能力は「学びに向かう力・人間性等」である。
5. 幼児の「心情・意欲・態度」を大切にすることは、この「学びに向かう力・人間性等」を育てる。

以上のように、整理し理解することにより、保育科学生は比較的うまく非認知的能力を理解できると考える。そして、近い将来自分の保育が熟したところで、本論で取り上げた論文等を発展的に読み、理解をさらに深めてほしい。

<参考文献>

- 北野幸子 (2017) 「保育のキーワード 非認知的能力」『保育ナビ7月号』フレーベル館48-49.
 国立教育政策研究所 (2017) 『非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関

する報告書』

国立大学法人お茶の水女子大学 (2016) 『幼児期の非認知的な能力の発達をとらえる研究—感性・表現の視点から—』

ジェームズ・J・ヘックマン (2015) 「子供たちに公平なチャンスを与える」『幼児教育の経済学』東洋経済 9-44.

汐見稔幸 (2017) 「保育所保育指針」『ここがポイント！ 3 法令ガイドブック』フレーベル館 75-174.

John, O. P. and Srivastava, S. (1999) The Big-Five Trait Taxonomy: History, measurement, and Theoretical Perspectives. In: Pervin, L.A. and John, O. P. (Eds.), Handbook of Personality: Theory and Research, Vol.2, Guilford Press, New York, 102-138.

西坂小百合、岩立 京子、松井 智子 (2017) 「幼児の非認知能力と認知能力、家庭でのかかわりの関係」『共立女子大学家政学部紀要』第63巻 135-142.